

令和3年度  
壱岐島医療福祉研究発表会  
プログラム・抄録集



~~令和4年2月10日(木曜日)~~ 3月29日(火曜日)

18:00~20:00

壱岐の島ホール(大ホール)

壱岐医師会・在宅医療推進部

令和3年度

壱岐島医療福祉研究発表会

プログラム

開場	3月29日(火曜日)	17:00
日時	令和4年2月10日(木曜日) 18:00~20:00(受付開始17:30~)	
場所	壱岐の島ホール(大ホール)	
司会	(有)弦観光 グループホーム 壱岐の郷 林 大雄	18:00~
挨拶	在宅医療推進部会 会長 光武 新人	18:05~
演題	(発表6分/質疑4分/1人)	
【座長】	壱岐市社会福祉協議会 総務企画課長 瀬川 康夫 財務管理課長 松原 清孝	18:15~
【1】	療養病棟の急変時・終末期に対する意思決定の現状と課題 社会医療法人玄州会 光武内科循環器科病院 看護師◎福田雅子	18:15~25
【2】	訪問リハビリテーションだからできたこと・これからすべきこと ~6年間の活動を振り返って~ 医療法人(社団)協生会 介護老人保健施設 壱岐 理学療法士 ◎植村祐也	18:25~35
【3】	外国人研修生受け入れと今後の課題 長崎県壱岐病院 4階療養病棟 看護師 ◎日高由記	18:35~45
【4】	気づいて!! 私は何がしたいの!? ~行動から読み取る本音~ 社会医療法人玄州会 介護老人保健施設 光風 介護福祉士 ◎岩谷那奈子	18:45~18:55
【5】	「自分で食べられる幸せ」 社会福祉法人 光風会 特別養護老人ホーム 光の苑 介護福祉士 ◎辻奈緒子	19:00~10
【6】	『嘔吐下痢から学ぶ感染予防対策の重要性』 特別養護老人ホーム 壱岐のこころ 感染食中毒予防委員会 介護福祉士 ◎戎谷裕子	19:10~20
【7】	新型コロナウイルス感染症対策を行う中で得られた成果 社会福祉法人 博愛会 特別養護老人ホーム ハッピーヒルズ(幸せの丘) 生活相談員 ◎山元恵太	19:25~35
座長まとめ		19:35~40
総評	壱岐医師会長 江田 邦夫	19:40~45
表彰式	優秀賞1 最優秀賞1	19:45~19:55
閉会		20:00

研究テーマ：療養病棟の急変時・終末期に対する意思決定の現状と課題

所属施設名：光武内科循環器科病院 療養病棟

研究者： ◎福田雅子・山内加代子・納富佐里・横山純子・木脇恵子

【はじめに】当療養病棟入院患者の平均年齢は 83 歳で、意思決定困難者が 90%以上を占めている。患者が意志決定できない状況において「患者自身が何を大事にして生きてきたかを導き出し、『どう生きたいか』について患者・家族が考えるきっかけを作り、その人が最善の生を生き抜くことができる」意思決定支援を目指すにはどのような取り組みをすればよいのだろうかと考えた。そこでまず、療養病棟の患者・家族の急変時・終末期の意思決定に関する希望書回答の実態調査を行い、当病棟の現状と課題を明らかにしたので報告する。

【目的】療養病棟患者・家族の急変時・終末期の意思決定の現状と課題を明らかにし、今後の療養病棟におけるエンドオブライフケアの意思決定支援に繋げる。

【用語の定義】エンドオブライフケアとは「診断名、健康状態、年齢にかかわらず、差し迫った死、あるいはいつかは来る死について考える人が、生が終わる時まで最善の生を生きることができるよう支援すること」

【方法】調査期間：2020. 5. 15～2020. 5. 18 調査対象者：療養病棟入院患者 48 名

調査方法：当院の希望書の取得状況・希望の項目内容回答の実態・希望書回答者（患者との関係）の単純集計

【倫理的配慮】患者が特定される内容は掲載しない。入院時に患者の個人情報の取り扱いについて文書を掲示して承諾を得た。

【結果】希望書所得状況：希望書が取得できている患者は 32/48 名（66.7%）、取得できていない患者は 16/48 名（33.3%）であった。そのうち、急変時は 32/32 名（100%）、終末期は 24/32 名（75%）であった。希望書の回答者は全員家族であった。心臓マッサージ希望するが挿管は希望しない 7 名、心臓マッサージ希望するが昇圧剤希望しない 3 名、心臓マッサージ希望しないが昇圧剤希望する 2 名など看護師の視点として相反する回答と感じられる点が見られた。

【考察】「看護師は、治療の選択、療養の場の選択、最期の迎え方の選択など、様々な場面における患者・家族の意思決定を支援していくことが求められている」とされている<sup>1)</sup>。療養病棟の意思決定支援の課題として次のことが考えられた。当院療養病棟患者の 33%が希望書を取得できてなかった。これは、意思決定支援に関するガイドラインがないため、面談時期は主治医判断となっていることが一因と考えられた。取得できていた希望書の 100%は家族による代理決定であった。寝たきり・認知症患者が多く本人の意志が確認出来てないことや、家族が島外在住あるいは疎遠などで患者の意思決定支援が難しいことが課題であることが明らかになった。そのため、意思表示が出来るうちにリビングウィル・終末期について家族や患者と話す機会を持つことが重要であると考えられた。看護師の視点として相反する回答がみられたことから、面談時、同席した看護師は家族が説明を十分に理解できたか確認し、矛盾する回答を確認・修正することが重要であると考えられた。

【結論】今後、エンドオブライフケアに繋がる意思決定支援のために、1. 急変・終末期の意思決定支援のガイドラインの作成、2. リビングウィルの周知・浸透、3. 患者・家族の望む意思決定支援に取り組む体制作りが重要であると考えられた。

【引用文献】 1) 坂井志麻, 病棟におけるエンドオブライフケア 看護技術 2016 年 10 月号 p86 (vol162.No. 12-1206)

研究テーマ：訪問リハビリテーションだからできたこと・これからすべきこと  
～6年間の活動を振り返って～

所属施設名：介護老人保健施設 壱岐

研究者： ◎植村祐也 西口亜沙美

### 【目的】

当施設の訪問リハビリテーション（以下、訪問リハ）のサービス提供を開始して6年が経過した。今回の発表の機会に当たり、これまで提供してきたサービスの概要と内容を改めて見直した。また、利用状況をデータ化することで、島内の多くの皆様に訪問リハの現状を紹介する。また、自らもこれから訪問リハに取り組む上での課題と展望を再確認する。

### 【方法】

平成27年3月から令和2年12月までの訪問リハ利用者の年齢層、介護度、疾患分類、訪問リハを選択した理由、利用期間、終了した理由をそれぞれ集計した。

### 【結果】

開始時の年齢は80歳代が最も多く(45%)、次いで70歳代と90歳以上(それぞれ18%)、60歳代(16%)、59歳以下(3%)であった。介護度は要介護1が25%、要介護2が21%と多く、要介護5が5%、要支援1が6%と少数であった。疾患は52%が整形疾患で、次いで脳血管疾患が21%、がん、がん以外の内科疾患、精神疾患、その他の疾患がそれぞれ6～7%となった。訪問リハを選択した理由として身体的理由(34%)、精神的理由(35%)、環境的理由(10%)、リハビリのみ希望(10%)、施設都合(7%)、その他(4%)と分類された。利用期間は6ヶ月未満が51%と最も多く、約95%が2年以内で利用終了となった。その理由としては、目標達成(16%)、通所サービスへ移行(17%)、施設入所(8%)、体調の悪化にてリハ中止(14%)・入院(33%)、死亡(2%)、その他(10%)と分類された。

### 【考察】

利用期間と終了した理由の関連性に着目すると、6ヶ月未満で目標達成による終了や通所サービスへ移行した事例も見られた。また、選択した理由と終了した理由の関連性に着目すると、体力的な問題があったり、外出や集団生活に抵抗がある利用者を通所サービスに移行することもできた。さらには、訪問リハビリを継続することによって身体機能や動作能力を維持・向上することができ、在宅生活を維持できている事例も見られている。

訪問リハは病院での機能訓練とは違い、実際の生活の場で動作練習や住環境整備、介護者へのサポートなど多方面から利用者の生活を支援できるという強みがある。それを実現していくために私たちも日々、利用者の心身状態や生活の変化に注意し、よりよい在宅生活を送るための提案ができるよう常に努力しなければならない。また、今後はあらゆる疾患やターミナルの方に対してもQOL向上のため訪問リハの強みを生かし、積極的に関わっていくことを目指したい。

研究テーマ：外国人研修生受け入れと今後の課題

所属施設名：長崎県壱岐病院 4階療養病棟

研究者：◎日高由記 橋口伊智代 大桑美智子 長嶋友美

**【目的】**外国人研修生に対する、これまでの指導や実際を振り返り、現状を見直すことで今後の課題を明確にする。その上で研修生受け入れのためのプログラム作成の足掛かりにする。

**【方法】**

- 1 期間 R3年5月～R3年11月
- 2 対象 4階療養病棟看護師(12名)・看護補助者(9名)  
外国人研修生(2名)／計23名
- 3 方法 質問紙法を用いた調査研究  
研修生受け入れ前から現在までの受け入れ準備内容・指導内容・方法を時系列にまとめた。指導者には、実際の指導内容・方法、困ったこと、改善点などのアンケートを実施した、研修生には研修での理解度も加えて調査した。

**【結果】**受け入れ準備は、研修生入職の5か月前より会議を繰り返し行い、依頼業務内容、タイムスケジュール、指導方法などを議論した。日誌や動画を作成し、視覚的な指導方法を活用した。入職後、約2か月で独り立ち出来た。アンケート結果では、勤務したスタッフは20名で、うち指導に携わったのは看護師7名・看護補助者2名の9名のみであった。動画や業務を一緒に行いながら口頭での指導が77%を占めた。業務内容は、看護補助者と同様の介護業務全般であった。研修生への実践内容の理解度を問う質問では「少し分からなかった」と回答し、理由としては日本語、方言と答えた。

**【結論】**

- ・口頭での指導だけでは理解できず、その要因として日本語、方言があった。
- ・写真など視覚を活用したマニュアルの作成が必要である。
- ・看護補助者は、実際には指導を行っているが、指導しているという認識をもっていないことが多い。

研究テーマ：気づいて！私は何がしたいの？～行動から読み取る本音～

所属施設名：社会医療法人 玄州会 介護老人保健施設 光風

研究者： ◎岩谷那奈子

### 【目的】

認知症を有している方は、したいことがあっても言葉にして伝えることが難しい場合がある。その思いをくみ取る事も私達の役目である。

今回、入所時より帰宅願望等が強く、立ち上がりが多く見られていたご利用者に対し、今まで見られなかった行動が見受けられた事に関わる機会が増え、その方をもっと理解したいと思うようになり、その方に合った役割を提供することで立ち上がりや不穏が軽減した事例を紹介する。

### 【症例】

87歳女性。入所時は立ち上がり多く見られ落ち着かれない様子。訴え内容は帰宅願望が多く職員により「座ってください」と行動を抑制する対応により不穏状態続くことがあった。他利用者からは「また立っちょる」「お座り～」と否定的な発言が聞かれていた。入所中、身の回りの整理や、他の利用者様のお世話をされる様子が見られた為、世話好きで面倒見が良いという印象を受けた。そのことから、日常生活の中でT氏の性格を活かす為に役割として9時と13時にガーグルベースと口腔ケアのお皿拭き・16時に袋たたみを実施した。

### 【結論】

日々、同じことの繰り返しの施設生活の中で「身の回りの事・お手伝い」など生活に密着した作業を提供することでその方の施設での居場所を作り、少しの間でも抱えている不安を軽減させることが出来たのではないだろうか。また、立ち上がられた際も言葉掛けをどうされましたかなどの問いかけに変える事でT氏の訴え内容が把握でき、利用者本位のケアが提供できたと考える。

利用者が何を求め、訴えているのかをチームで考えそれぞれにあった対応を行なっていきたい。

研究テーマ： 自分で食べられる幸せ  
所属施設名： 特別養護老人ホーム 光の苑  
発表者： ◎辻 奈緒子

### 【目的】

長期間の入所生活で、身体機能が徐々に低下し自力摂取できなくなったケースについて、残存機能にアプローチすることで再びご自分で食べられるようになるまでの取り組みをここに報告する。

### 【事例】

A氏 90代男性 自立度C-1 認知度IV

症病名：脳梗塞 右麻痺 運動性失語 誤嚥性肺炎

食事摂取能力の経過：

入所当初は自助食器を使用し左手でスプーンを持ち自力で摂取されていたが、徐々に手づかみでの摂取となる。ため込み、流涎、ムセ、傾眠、左への傾きあり。入所10年以上が経過し、誤嚥性肺炎、発熱、点滴、臥床時間の増加、食事への意欲低下がみられるようになる。おやつは自力で食べられるが、食事は全介助。

### 【方法】

食事時の車いす上のポジショニングへの介入。

福祉用具の選定をしない。

目の前に食事をセッティングし献立を説明。

### 【結果】

- ・ポジショニングにより食事が視野に入るようになった。
- ・意欲が見られ自力で召し上がられた。
- ・表情は生き生きしておられ、笑顔を見せられる。
- ・ムセを引き起こすことが少なくなった。

### 【結論】

ご自分で食事を召し上がることで、とても笑顔が多くなり、他利用者と同じリビングで周囲にも目をやりながら、食べる幸福感を感じておられた。

「まだ左手でおやつが食べられるならご飯も食べられるのでは？」という思いでアプローチした。私たちのケア一つで残存機能を生かすことも奪うこともある。残存能力を生かす工夫で、ご利用者に生きる力を与えられるのではないか。

研究テーマ 『嘔吐下痢から学ぶ感染予防対策の重要性』  
所属施設名 特別養護老人ホーム 壱岐のこころ  
研究者名 ◎戎谷 裕子、 感染食中毒予防委員会

#### 【はじめに】

施設内で嘔吐下痢が発生し蔓延したことで、施設スタッフ全体に対して感染予防対策の周知徹底ができていなかった事が考えられる。このことをきっかけに、スタッフ全員が落ち着いて的確に対応できるよう改善点を見つけ出し、改めて感染予防対策の周知を行った。

#### 【目的】

施設において様々な感染症に、ご利用者やスタッフが感染しないようにする。感染者が発生した場合も蔓延しないように、スタッフ全員感染対策の徹底をする。

#### 【方法】

- ① 嘔吐下痢がなぜ蔓延してしまったのか、スタッフ全員で考えるようアンケートを実施
- ② あらゆる感染症について施設内研修にて資料を配布し、勉強会を実施。
- ③ 施設独自のコロナフェーズ作成

#### 【結果】

- ① 原因として、嘔吐物処理セットの周知ができていなかった。汚物処理の手順が周知されておらず、徹底できていなかった。スタッフ一人ひとりの自覚が足りず感染対策（感染予防策）が徹底できていない等があげられた。結果、嘔吐物処理セットをわかりやすく一つにまとめ、慌てず落ち着いて対応できるよう、手順を記したのも一緒に、ユニット内のユーティリティに設置した。更に、正しい処理を行ったあと正しい手洗いを行えば良い。という基本的な結果に繋がった。
- ② 嘔吐下痢だけでなく、色々な感染症があることを知ってもらい、どのような予防が適しているのかを委員会で話し合い、スタッフみんなに勉強会を開催。感染症に対し関心を持ってもらい、意識づけに繋がった。
- ③ コロナフェーズを作成する事で、感染対策に対し意識が高まり自分自身を守ることで、周りの人も守れるものだと思えるようになった。

#### 【まとめ】

どんな感染症でも、罹ってしまえばとても辛い思いをしてしまう。施設内でも施設外でもきちんとした感染予防対策を行い、自分自身をしっかりと守ることで、周りの人も守ることができるのだと考える。今後も「感染予防はとても大切なことだ」という事を意識して取り組んでいきたい。



研究テーマ：新型コロナウイルス感染症対策を行う中で得られた成果

所属施設名：社会福祉法人 博愛会 特別養護老人ホーム ハッピーヒルズ(幸せの丘)

研究者名：◎山元恵太(相談支援室主任:生活相談員)

(共同研究者) 山川美佐代 小島仁美 福原しのぶ

#### 【取り組み】

- ・面会の制限（島内在住・島外在住等）
- ・オンライン面会の導入
- ・ショートステイの受け入れ制限
- ・ご入居者同士の交流制限
- ・職員への行動制限（外出・会議・休憩場所等）
- ・外部業者の出入り制限

#### 【成果】

- ・普段から利用されている「LINE」を利用する事で、オンライン面会導入に対しての抵抗が軽減された。
- ・オンライン面会では、本来であれば自宅に帰らないと見る事ができない風景や自宅の様子を手軽に見せる事ができた。
- ・看取り支援中のご入居者の体調が急変し、島内在住のご家族がすぐに駆け付けられない状況であったが、偶然オンライン面会をしていた島外在住のご家族が医師の到着までご本人へ声を掛け続け、最終的には医師による死亡確認までビデオ通話を使って立ち会う事ができた。

#### 【まとめ】

- ・偶然ではあったが、ビデオ通話を使って看取り支援が行えた事はオンライン面会を早めに導入し、継続して良い結果に繋がった。
- ・家族状況など考慮しながらになるが、新たな看取り支援の選択肢として提案できる環境を整えたい。
- ・看取りだけでなく様々な用途でのオンライン化を模索して、今の時代だからこそできる新しい介護支援の確立を目指したい。

#### 【今回の発表内容についてのご紹介】

今回時間の都合によりお話しできなかった内容や新型コロナウイルス感染症対策についてグループワークなどを行った様子が「吉岐のケアニンネットワーク」公式 YouTube チャンネルにアップされています。そちらもご視聴いただくと幸いです。

吉岐のケアニンネットワーク  
YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCdBnztBaeA2nH1zPRnnSc2g/featured>

